様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6　月 5　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：平成 18 年度～20 年度
課題番号：18530254
研究課題名（和文）
「在来的経済発展」の国際比較―都市中小工業を中心として
研究課題名（英文）
Comparative Study of “Indigenous Economic Development”: With Special Reference to Urban Small-scale Industries

研究代表者　谷本　雅之（TANIMOTO, MASAYUKI）
東京大学大学院経済学研究科・教授
10197535

研究成果の概要：本研究は、近代日本の経済発展過程には、工場制工業に代表される、西欧からの技術移転に基づく「近代」的な産業発展とともに、必ずしも工場制をとらない中小作業場の発展が重要であったことを、都市小工業のケース・スタディを通じて明らかにした。その基盤には、業主と家族労働に担われた「小経営」を基盤とする生産組織の存在があり、それは西欧とは異なる発展経路の特徴を示すものであった可能性も、比較研究の中から指摘した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	480,000	2,780,000

研究分野：近代経済史
科研費の分科・細目：経済学・経済史
キーワード：在来的経済発展、グローバル・ヒストリー、都市小工業、産業集積、分散的生産組織、家族経済、小農社会、Labour-intensive Industrialization

１．研究開始当初の背景

申請者は、近代日本の経済発展過程には、工場制工業の導入に代表される、西欧からの技術移転に基づく「近代」的な経済発展とともに、業主と家族労働に担われた「小経営」を基盤とする「在来的経済発展」が重要な位置を占めていることを、農村織物業のケーススタディを中心に主張していた。もっとも農村を存立基盤とするこのケースでは、小農世帯の家族戦略にあり、農業経営の規定性が重視されている。しかし、工業化は本来的に脱

農業化をともなうものであり、農村経済の議論だけでは、その射程に限界がある。そこで申請者は、戦間期東京の都市小工業の分析に着手し、一定の成果を挙げつつあった。研究開始の時点では、この分析の深化と一般化が求められる段階にあった。

一方この「在来的経済発展」がどこまで日本の特徴といえるかが、別途、検討を要する問題として浮かび上がって来る。実際、Sabel, Chales and Jonathan Zeitlin "Historical alternatives to mass production", *Past and Present* 1985 以来、欧米の経済史・経営史研究においても、産業化の過程において、生産形態の多様を主張する見解が提出されるようになっていた。近年のロンドン史研究でも、19 世紀後半以降の、都市産業の発展を主張する見解がだされている（Johnson, Paul "Economic Development and Industrial Dynamism in Victorian London" in *The London Journal* 21-1,1996）。国際比較の観点を踏まえた都市小工業の研究が求められていたといえる。

２．研究の目的

申請者は、近代日本の経済発展過程には、工場制工業の導入に代表される、西欧からの技術移転に基づく「近代」的な経済発展とともに、業主と家族労働に担われた「小経営」を基盤とする「在来的経済発展」が重要な位置を占めていることを主張してきた。本研究は、申請者の近代日本の都市小工業史研究の深化と、それをベンチマークとしつつ、ドイツおよびイギリスの事例との比較を行い、都市小工業および都市労働市場に関する比較経済史的検討を行うことを目的としている。その作業を通じて、「在来的経済発展」の特性をグローバル・ヒストリーの中で評価する手掛かりを得たい。

３．研究の方法

本研究では、関連する２つの異なる作業の遂行を通じて、研究課題の解明を行った。
一つは、日本では典型的な都市小工業として発展した玩具工業に関し、欧米諸国との競争状況を明らかにし、その産業発展の特質を明らかにすることである。すでに申請者は、戦間期日本では玩具工業が小工業を基盤として、東京において急速に成長したこと、それが輸出に牽引されていたこと等を明らかにしてきた。本研究では、輸出市場での具体的な競争状況を明らかにするとともに、競争の帰結をもたらした要因として、各国の玩具産業の存在形態の差異に着目し、その発展史の比較を試みる。さらに雑貨から軽機械へと連なる、日本の最終消費財輸出の長期的変化（明治から1960年代まで）にも着目し、個別産業の知見のより一般化も試みる。

もう一つの作業は、都市小工業の存在形態について、その生産を担う労働側からアプローチすることである。申請者は戦間期東京に関するこれまでの研究の中で、徒弟から職工を経て小経営主にいたるライフコースが、農村からの移動者を中心に、都市における現実のライフコースとして、認識されてきたことを明らかにした。そこでは、世帯単位での自営業就業が基盤となっている。本研究では、イギリスのロンドンをフィールドに、都市工業の就業構造を検討し、その結果を日本の史実と比較することで、日本における小経営就業の独自性と普遍性の考察を試みる。

４．研究成果

1） 東京を中心とする都市小工業の発展過程の分析の成果を、近年グローバル・ヒストリーの分野で提唱されている、Labour-intensive Industrialization 論の中に位置づけた。その内容は、国際経済史学会、および International

Conference of Eastern Studies の二つの国際学会で報告された。またその内容の主要部分は、Labour-intensive Industrialization 論に関する最初の国際的な学術書（Austin, Gareth and Kaoru Sugihara eds. *Labour-intensive Industrialization in Historical Perspective*, London, Routledge, forthcoming）への収録が決まっている。

2） 都市小工業史を、幕末から始まる最終消費財輸出の中に位置づけ、さらに、戦後の軽機械輸出の発展を展望することで、在来的経済発展論の視角から、近代・現代日本経済史を一貫して把握する議論を提起した。その成果は、アメリカ経済史学会の年次大会で報告された。

3） 都市労働市場史に関しては、ロンドンのセンサス集計データの入力作業が終了し、1851-1931 年間のロンドンの労働市場に関するデータ・ベースがほぼ完成した。またドイツ玩具工業に関する資料収集が、現地調査を踏まえて進行し、主要統計データのデータベース化が完了に近づいている。そのほか機会を得て、19 世紀末から 20 世紀前半のパリの産業発展に関する資料蒐集も行った。これらのデータについての本格的な分析は現在進行中であるが、初期的な分析結果は得られており,たとえば、ロンドンと東京の都市工業において、同一業種でもその労働力構成（性別、年齢別）や自営業就業率が異なることなどが明らかとなっている。

４）「在来的経済発展」論をグローバル・ヒストリーに位置づける作業の一環として、江戸時代から 20 世紀前半にいたる日本の綿業発展を、「小農経済」との関連を機軸に一貫した過程として描き出す論稿もまとめた。その英語版の論稿は、世界綿業史における日本の経験の共通性と差異性を明らかにする成果であり、綿業に関する国際的な学術書の１章として収録・公刊された（Riello, Giorgio and Prasannan Parthasarathi eds. *The Spinning World: A Global History of Cotton Textile 1200-1850,* Oxford University Press）。

５）なお、こうした産業発展の特徴を、申請者は「在来的経済発展」の語で総括的に表現しており、この用語は、たとえば比較経済史に関する一つの集大成である斎藤修『比較経済発展論』（岩波書店、2008 年）において言及されるなど、近年の社会経済史研究において、一定の認知を得ているといえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1　件）

①<u>谷本雅之</u>「戦前期『資産家』の諸活動とその背景」独立行政法人労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』、562 号、2007 年、44-52 頁、査読なし

〔学会発表〕（計 4 件）

①<u>Tanimoto, Masayuki</u> “The Evolution of Export-oriented Industries in Japan's Economic Development :From ‘Labour-intensiveness’ to ‘Skill-intensiveness’ The 2008 Economic History Association Meetings, 2008.9.14, Omni Hotel at Yale, New Haven, U.S.A

②<u>谷本雅之</u>「近代日本の経済発展と家族・世帯経済」比較家族史学会第 50 回大会、2008 年 6 月 22 日、東北大学

③<u>Tanimoto, Masayuki</u> “From Peasant Economy to Urban Agglomeration: Japan’s path to industrialization in early-modern/modern Japan” 52nd International Conference of Eastern Studies, 2007.5.18,日本教育会館（東京）

④<u>Tanimoto, Masayuki</u> ”From Peasant Economy to Urban Agglomeration: A Transformation of ‘Labour-intensive Industrialization’ in Interwar Japan” 14th International Economic History Congress, 2006.8.24, Helsinki University,

Finland

〔図書〕（計　5　件）

①谷本雅之「分散型生産組織の論理」阿部武司・中村尚史編『講座・日本経営史』第 2 巻、ミネルヴァ書房、2009 年刊行予定

②Tanimoto, Masayuki ”From Peasant Economy to Urbanagglomeration: The Transformation of ‘Labour-intensive Industrialization’ in Modern Japan” (Discussion Paper/ CIRJE-F-516, http://www.e.u-tokyo.ac.jp/cirje/research/dp/2007/2007cf516ab.html, Austin, Gareth and Kaoru Sugihara eds. *Labour-intensive Industrialization in Historical Perspective*, London, Routledge, forthcoming 2009

③Tanimoto, Masayuki “ Cotton and the Peasant Economy: Foreign Fibre in Early Modern Japan” (Discussion Paper/ CIRJE-F-600, http://www.e.u-tokyo.ac.jp/cirje/research/dp/2008/2008cf600ab.html , Riello, Giorgio and Prasannan Parthasarathi eds. *The Spinning World: A Global History of Cotton Textile 1200-1850,* Oxford University Press, 2009, pp.367-385)

④谷本雅之「日本綿業とグローバル・ヒストリー」水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、2008 年、126-140 頁

⑤谷本雅之「戦間期日本における都市型輸出中小工業の歴史的位置―在来的経済発展との関連」中村哲編『近代東アジア経済の史的構造：東アジア資本主義形成史Ⅲ』日本評論社、2007 年、217-240 頁、韓国語版、中国語―中華人民共和国版、中国語―台湾版も 2007 年に刊行

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

谷 本　　雅 之　（ TANIMOTO, MASAYUKI ）
東京大学大学院経済学研究科・教授
10197535

(2)研究分担者

(3)連携研究者